

2017年3月22日

京王プラザホテル ニュースリリース

ロココ時代の宮廷も彩った日本発祥の装身具「扇」の魅力を紐解く
 「貴婦人たちの美意識展 扇～海を渡った美の意匠～」
 ロビーで約 50 点を無料展示 その魅力を語る特別午餐会も
 5月1日(月)～5月31日(水)

京王プラザホテル（東京：西新宿、社長：山本護）は、5月1日（月）から31日（水）まで、「貴婦人たちの美意識展 扇～海を渡った美の意匠」と題し、日本発祥の装身具で時代と国境を越え世界の女性の装いを彩ってきた「扇」にスポットをあてたイベントを開催いたします。檜扇から中啓、舞扇まで多様な場面で用いられてきた日本の扇とロココ文化の隆盛とともに上流女性の装いとして親しまれた18世紀以降の西洋の扇を計約50点展示しその奥深い魅力を入場無料でご覧いただきます。また、5月16日（火）にはポーラ文化研究所の富澤洋子さんによるトークとこの日限りのランチをお楽しみいただく特別イベント「西洋の扇 おしゃれのスパイスを楽しむ午餐会」を開催するほか、期間中はレストラン＆ラウンジ6店舗においてイベント開催を記念した特別メニューもお楽しみいただきます。

「日本の扇」は京都伝統産業ふれあい館の協力により展示するもので、宮中で使用した「檜扇」成り立ち、日本舞踊や落語にも見られるシーンによる使い分けなど、その奥深さと魅力を時代背景とともに紐解く作品約30点をご紹介します。

「西洋の扇」はポーラ文化研究所の協力により展示するもので、華やかなサロン文化を彩る小道具として18～20世紀の上流女性に愛用された約20点をご紹介します。婚礼に用いられたレースのように繊細な透かし彫りの扇、ゴシック様式の小尖塔風の骨に金彩を施したきらびやかな扇、中国で作られたエキゾチックな扇、王室御用達の扇、工房が製作したアールヌーヴォー様式のデザインになぞかけの施された扇など、多様な材質とデザインの扇を展示し、その歴史の変遷もご紹介いたします。また、言葉を発する代わりに扇を用いた仕草で気持ちを表現した扇言葉など時代により様々な役割を果たした扇の面白さもお楽しみいただける展示となります。



マルタン兄弟の技法による上質なコーティング材（ワニス）を使用した扇（1860年頃 フランス）何度も重ね塗りをする事で透明感が生まれ油彩に近い表情が出ている。当時の流行を象徴するような画題も魅力のひとつ。

「貴婦人たちの美意識展 扇～海を渡った美の意匠」 期間：5月1日(月)～31日(水)

場所：3階/アートロビーほか **入場無料**

協力：ポーラ文化研究所・京都伝統産業ふれあい館・一般社団法人文化継承機構

「日本の扇展」 場所：3階/アートロビー

「西洋にみる18世紀から20世紀の扇展」 場所：2階/レストランコリドール

「扇の変遷 パネル展」 場所：南館2階/メインバー<ブリアン>前 ほか

■特別イベント 『西洋の扇～おしゃれのスパイスを楽しむ午餐会～』 **【要予約】**

日時：5月16日（火） トーク 12:15p.m.～（受付 11:45a.m.） 食事 1:30p.m.～

場所：高層階宴会場（トーク）/フレンチ&イタリアン<デュオ フルシエット>（食事）

料金：1名様 8,000円（トーク、お料理、サービス料・税金込）

トーク：ポーラ文化研究所 学芸員 富澤 洋子

■レストランフェア 館内レストラン・ラウンジ計6店舗

展示に関するお問合せ・ご予約 / (03) 5322-8061 **【ロビーギャラリー直通】**

特別イベント・レストランのお問合せ・ご予約 / (03) 3344-0111 (代表) レストラン予約

本件に関するお問合せ先：

株式会社京王プラザホテル 営業戦略室 企画広報 斎藤 潤子・大塚 智生・石川 綾子・佐藤 亜紀
 〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-2-1

Tel 03-5322-8010 Fax 03-3346-2479

<http://www.keioplaza.co.jp>

「西洋にみる 18 世紀から 20 世紀の扇展」

場所：2 階/レストランコリドール



●結婚式・婚礼用の扇・天蓋、盾文様
1780-1790 年頃 中国

フランスの花嫁の嫁入り支度には、婚礼の引き出物として配る多数の扇が含まれており、純白を基調としたレース素材に天蓋など愛を祝福する絵柄が多く使用されていた。中央の文様のない盾は購入時に花嫁のモノグラムを刻んだとされる。



●中国の扇・山水風景
1870 年頃 中国（広州）

当時の中国の絵画などで使用された絵柄を扇に用いている。庭やつり人、小船などのモチーフは緑、青の珪瑯引きで七宝のようなガラス質の輝きを放つ。金線細工の広東扇は、ヨーロッパで人気を博した。



●角の扇・羊飼いと羊の群れ
1825-1830 年頃 フランスかイギリス

新ゴシック様式の小尖塔風の骨に金彩を施している。中央には羊飼いが羊の群れを監視しながら笛を吹く絵柄になっており、リボンはピンクのばらをあしらった白い絹。開くととても華やかな作品だが、実際開くシーンは少なく折りたたんでいることも多い。



●デュヴェルロワの扇・なぞなぞ
1900 年頃 フランス

19 世紀はじめにパリでピエール・デュヴェルロワが創業した扇工房の扇。特徴的なのがアールヌーヴォー様式の装飾に 6 つのなぞかけの詩があり、答えはすべて扇となる。親骨に G.T. のモノグラム入りで、ブルーと金の軽やかな色彩が美しい。当時を象徴するデザインである。

提供：ポーラ文化研究所